徳島大学教養部紀要
(人文・社会科学)
第二十巻 別刷
1985

ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」

石 川 栄 作

徳島大学教養部紀要
（人文・社会科学）
第二十巻　1985

ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」

石　川　栄　作

Gregorius Hartmanns von Aue

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

In *Gregorius* Hartmanns von Aue ist die Gegenüberstellung von dem höfischen und dem geistlichen Motiv zu erkennen. Hauptsächlich diese beiden Motive behandelnd, möchten wir hier den Weg der Mutter und des Sohns verfolgen, um die Absicht und die Eigentümlichkeit dieses Werks aufzuhellen.

Minne und *êre*, die etwa in dem Artusroman *Erec* eine große Rolle spielen, sind in *Gregorius* ganz verdammt: *minne* ist beim ersten Inzest geradezu Werk des Teufels und *êre* Instrument des Teufels und der Sünde. Um dieser *werltlichen êre* willen verheimlichen Bruder und Schwester ihre *misset ât*, was später Anlaß zu den größeren Sünden gibt.

Der unter dem Schleier des Geheimnisses auf der Klosterinsel gewachsene Gregorius erfährt eines Tages zufällig, er sei ein Findelkind. Diese *schande*, den er kaum ertragen kann, bewirkt, daß er auf der *ritterlichen gir* besteht. Seine Rittersehnsucht ist an sich nicht sündhaft. Als er aber trotz der Erkenntnis seiner Abstammung den Rat des Abts verweigert und um *ritterliche êre* aus der Insel auskehrt, entsteht ihm die Sünde der *superbia*. Sein Hochmut ist eine Ursache des zweiten Inzestes.

Die andere Ursache liegt darin, daß die Mutter um der *werltlichen êre* willen ihr geistliches Verlöbnis mit Christus bricht, als Gregorius im Land der Mutter erscheint. Hier sind *minne* und *êre* wieder dem Teufel verfallen: die höfische Welt um Mutter und Sohn ist ganz und gar von der Liste des Teufels verdammt. Das eigentliche Interesse des Dichters liegt aber nicht darin, die Gewalt des Teufels zu schildern. Denn Gregorius, *der guote sündære*, weiß nun die echte Buße zu tun.

Die Haltung des Büßers Gregorius, der ein Häuschen eines Fischers erreicht, ist ganz anders als früher. Aus diesem Kontrast ergibt es sich, daß er ohne *superbia* zu der echten Buße bereit ist.

Daß er nunmehr der wahre *riuwesære* ohne *superbia* ist, zeigt auch der Dialog mit den Römern, der einen Kontrast zu dem Disput mit dem Abt bildet: früher besteht er um der *werltlichen êre* willen auf dem Klosteraustritt, jetzt aber will er auf dem Felsen bleiben. Dort geht es um Gregorius' *superbia*, hier um Gottes Wille. Nach Gottes Wille wird er schließlich Pabst. Das frühere höfische Motiv wird hier durch das geistliche Motiv ersetzt, das die Mutter und den Sohn glücklich und ewig zusammenführt.

Die Stellung des Pabstes, die Gregorius auf eine konsequent geistliche, asketische Weise erreicht, ist das Symbol der harmonisch-idealistischen Welt, wo die *ritterliche gir* des Gregorius (*gotes ritter*) und der Rat des Abts (*gotes kint*) verschmerzen. Um diese harmonische Welt zu erreichen, muß man sich völlig Gott hingeben, ohne an *gotes hulde* zu zweifeln. Diese völlige Hingabe an Gott ist gerade die Absicht dieses Werks. Wir können also Hartmanns Idealismus und die Eigentümlichkeit dieses Werks in seinem Vertrauen erspähen, daß man trotz aller Sünden dennoch gerettet werden kann, wenn man sich in Reue versenkt und rechter Buße widmet. Hartmann verherrlicht in *Gregorius* die völlige Higabe an Gott und Größe der göttlichen Gnade, die im nächsten *Armen Heinrich* noch innerlicher behandelt werden.

石　川　栄　作

序

ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」は、当時のほかの多くの叙事詩と同じように、他国の既成の物語を素材にしてドイツ語で再構成されたものであり、その原典は一般にフランスの「教皇グレゴアール伝」(Vie du pape Grégoire) であったと推定されている[1]。その素材と物語の性格から、ハルトマンの「グレゴーリウス」は、「エーレク」や「イーヴァイン」の宮廷叙事詩に対して、宗教叙事詩と呼ばれているが、宮廷騎士物語の要素を兼ね備えていることもまた明白である。しかし、例えば「エーレク」においてその中心テーマである minne（ミンネ）と êre（名誉）が主人公の勇敢な騎士的行為によって洗練されてゆくのに対して、この「グレゴーリウス」においてはそれら二つの宮廷的徳目は全く呪われたものとして現われているのも否めない事実である。ペーター・ヴァプネフスキーの言葉を借りれば、「宮廷文化」の道徳的・教育的そして浄化的な力である minne は、この作品においてはまさに悪魔の仕業であり[2]、宮廷的男性の本質を構成する騎士的徳目である êre は、悪魔と罪の道具と化しているからである[3]。この宮廷的名誉 (êre) を護るためには秘密が必要となり、それがまた次々と新たな秘密を生んで、ついには聞くも恐ろしい罪を犯す結果となるのである。この作品における宮廷的動機は全て悪魔の奸計によって罪の危険に晒されていると言えよう。

しかし、ハルトマンがここで描こうとしたのは、宮廷社会における悪魔の作用ではなく、その罪に対して人間のとるべき贖罪への姿勢である。このことは、プロローグでも語られているように、この物語が大きな重い罪（52）にまみれた、しかし「善き罪人」(von dem *guoten* sündære, 176) の物語であるということからも容易に知ることができよう。以前の宮廷的な秘密のモチーフはのちには宗教的な告白のモチーフによって取り替えられ[4]、心からの告白と真の贖罪行為によって母と子は救済されることとなるのである。従って、罪をもたらす宮廷的な秘密のモチーフに対して、宗教的な告白のモチーフは救いをもたらしていると言えよう。本稿では、この二つのモチーフを中心にして母と子の二人が歩んだ道を辿ることにより、この作品の意図と特質を探り出すことにしたい。

1. 兄と妹の近親相姦―― minne と êre――

ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」は、序でも述べたように、宗教叙事詩と言われながらも宮廷叙事詩の要素を多分に含んでいる。この物語の冒頭で語られるアキテーヌ公国

1) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究（富士出版株式会社1948年、郁文堂1960年）367頁。
2) Peter WAPNEWSKI: Hartmann von Aue. 7., ergänzte Auflage. (Sammlung Metzler Band 17) J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1979. S. 98.
3) Ebd., S. 99.
4) この秘密のモチーフと告白のモチーフについては次の研究書が大きな示唆を与えてくれた。K. Dieter GOEBEL: Untersuchungen zu Aufbau und Schuldproblem in Hartmanns ‚Gregorius'. (Philologische Studien und Quellen Heft 78) Erich Schmidt Verlag Berlin 1974.

の父王の教え (lêre) もその要素の一つであろう。重い病の床につき、やがて死の訪れるのを認めた (190–3) 父王は、その双生児兄妹の手を握ってこう教えを諭す。

er sprach: 〉sun, nû wis gemant	父は戒めた。「わが息子よ、ようく聞くがよい。
daz dû behaltest mêre	父の与える
die jungisten lêre	臨終の教えを
die dir dîn vater tæte.	いつまでも心に刻むのだ。
wis getriuwe, wis stæte,	誠実であれ、確固たれ。
wis milte, wis diemüete,	施しを惜しまず、謙譲を守り、
wis vrävele mit güete,	大胆に、だが心優しく。
wis dîner zuht wol behuot,	生まれ育ちにふさわしい良き躾を忘れずに。
den herren starc, den armen guot.	位高き者には屈せず、貧しき者には優しくあれ。
die dînen soltû êren,	一族の誉れを高め、
die vremeden zuo dir kêren.	また縁うすき者の心をもとらえるようにせねばならぬ。
wis den wîsen gerne bî,	経験豊かなる者の言をつとめて聞き、
vliuch den tumben swâ er sî.	いかなる時も、未熟なる者は避けるがよい。
vor allen dingen minne got,	何よりも神を敬い、
rihte wol durch sîn gebot.	神命により正しい裁きをせねばならぬ。
ich bevilhe dir die sêle mîn	今ここに、わが魂の行く末と、
und diz schœne kint, die swester dîn,	お前の妹である麗しいこの子をお前に委ねる。
daz dû dich wol an ir bewarst	妹によく心を配り、
und ir bruoderlichen mite varst:	傍らにあって兄の務めを果たすのだ。
sô geschiht iu beiden wol.	さすれば両人ともどもに、幸いが訪れることとなろう。
got dem ich erbarmen sol	神よ、われをあわれみ給え、そして、
der geruoche iuwer beider phlegen.〈	汝ら二人に心を向け、二人を守り給わんことを。」
(244–65)	

宮廷叙事詩によく見られるこの父王の教えの箇所は、その上さらに、ハルトマンが独自に挿入した創作であり、しかも単なる装飾的挿入ではなく、物語の構成に欠くことのできない、極めて重要な部分である[5] とも言われているが、事実、この父王の教えに従って物語は展開し始めるのである。

父王の死後その後継者となった兄は、父との誓約を忠実に果たすべく (als sînen triuwen tohte, 278)、妹の身にあれこれと心を配り、まずはこの二人の申し分のない幸せ (wünne, 302) のさまが展開される。ところがこの兄妹の幸せと安寧 (dise wünne und den gemach, 303)、二人を包む名望 (ir beider êren, 307) が悪魔の癪にさわるところとなり、悪魔はその二人の幸福と名望 (ir vreuden und ir êren, 315) を奪い取って、喜びを不幸に (ir vreude ûf ungewinne, 317) 転じる手はないものかと策をめぐらせる。そこで悪魔の案じた手だては、兄の妹に寄せる愛の心

5) 中島悠爾：父王の「警告」——「グレゴーリウス」研究の基礎的操作——大阪市立大学文学会「人文研究」16巻9号1965年。

(minne, 318) を過度にあおり立て、その妹への誠実な心 (triuwe, 321) をよこしまな思いへとねじまげさせることであった。この悪魔の唆かしに乗って (durch des tiuvels rât, 339)、兄は、この恐ろしくも恥ずべき所行 (dise grôze missetât, 340) を遂げるべく、昼夜を問わず妹に近づき、ついには妹——そのような恐ろしい恋心 (minne, 346) とは知らない——を愛撫し (triuten, 375) 始めるのである。minne は悪魔の仕業であり[6]、êre は悪魔と罪の道具である[7] と言えよう。宮廷文化の二大支柱である minne と êre はここで全く呪われたものとして理解されているのである。兄に対して妹が抵抗もせずに忌まわしい罪のきっかけを作ってしまったのも、まさにこの êre (名誉) のためである。

sie gedâhte: 〉swîge ich stille,	彼女は思った。「もし私がここで黙しているならば、
so ergât des tiuvels wille	悪魔の企みはなし遂げられ、
und wirde mînes bruoder brût,	私は兄の花嫁になってしまう。
unde wirde ich aber lût,	でも、もし騒ぎをおこしたら、
so habe wir iemer mêre	私たち二人の名望は地に落ちて、
verloren unser *êre*.〈 (385–90)	二度と帰らぬものとなってしまおう。」

この宮廷的名誉 (êre) のために妹は抵抗をためらい、ついに兄はその思いを遂げてしまったのである。兄妹の親しみもあまりにも度が過ぎたもの (der triuwen alze vil, 396) と言うほかはない。二人はこうして世俗的名望 (êre) を護るためにその恥ずべき行為 (daz mein, 442) を秘密にしようとするが、その秘密は次々と新たな秘密を生んでゆく結果となるのである[8]。妹が身重であることを知った兄もこの恥辱を秘密にしようと努める。

er sprach: 〉swester, gehabe dich baz.	彼は言った。「妹よ、元気をお出し。
ich hân uns vunden einen rât	この恥辱を
der uns ze staten gestât	隠すよい策を、
ze verhelne unser *schande*.	今私は思いついた。
ich hân in mînem lande	この国に
einen harte wîsen man	たいそう経験豊かな男がいる。
der uns wol gerâten kan,	彼こそきっと私たちに良き知恵をさずけてくれよう。
den mir mîn vater ouch beschiet	今は亡き父上も臨終(いまわ)の際に、
und mir an sîne lêre riet,	この男の教えを聞けと
dô er an sînem tôde lac,	私にお伝えになっておられた。
wande er ouch sînes râtes phlac.	彼はまた父上の顧問官でもあったのだから。
den neme wir an unsern rât	彼に助けを求めるとしよう。
(ich weiz wol daz er triuwe hât)	(この男の口の固さを私はよく知っている。)
und volge wir sîner lêre:	そして彼の教えに従うのだ。
sô gestât unser *êre*.〈 (486–500)	さすれば、私たちの名望も何とか守られよう。」

6) Vgl. Peter WAPNEWSKI: a. a. O., S. 98.
7) Vgl. ebd., S. 99.
8) Vgl. K. Dieter GOEBEL: a. a. O., S. 25–30.

こうして父王の教えに従って兄妹はその老騎士に助言を求めるのであるが、それは彼らの恥辱 (schande, 489; 564) を隠し、騎士的名誉 (êre, 500) を守るためであることは明白である。呼び寄せた老騎士に向かって兄は良き知恵を次のように仰ぐのである。

〉herre, nu vint uns einen rât	「賢い方よ、何か策をお授け下さい。
der uns nû aller nâhest gât,	私どもに何より必要な良き知恵を。
sô uns nû kumet diu zît	そして、時至って
daz mîn swester gelît,	姫が産褥につく時に、
wâ si des kindes genese	その子供の誕生が
daz ir geburt verswigen wese.	人に知られずに済むように。
nû gedenke ich, ob ich wone	私はまたこうも考えます。
die wîle mîner swester vone	われら二人のこの恥辱を
ûzerhalp dem lande,	一層人の目から隠すために、
daz unser zweier *schande*	この私がしばらくの間、姫のもとを遠く離れて、
sî verswigen deste baz.〈 (555–65)	国外に出ているのがよいのではないかとも。」

恥辱を隠すために国外に出るというこの若君の意見に老騎士は賛同して、懺悔の忠告を与えたあと、姫君の分娩が誰にも気づかれないよう必要な手はずを整えることを約束する (591–4)。こうして老騎士の忠告に従って、兄は神に罪を贖うために聖地へと旅立ち、妹はその地にとどまって贖罪に努めるとともに一人の男児を産むことになるのであるが、その老騎士の忠告 (566–623) は一言で言えば宮廷的な忠告であり、贖罪と言うよりはむしろ国の存続という世俗的名誉 (êre) の方に重点が置かれている。生まれた幼な子の運命を神に委ねて、小舟で海に流すことになったのも、心の底から神に帰依すると言うよりは宮廷的動機によるものである。なぜなら、極上の絹布に包まれた子供の傍らに金 20 マルクとともに添えられた見事な象牙板には、恥業を隠すため (ze helne daz mein, 738) にこの子を海に流すという動機がはっきりと書き込まれているからである。全ては世俗的名望 (êre) を護るため秘密のうちに運ばれるのである。

こうして小舟で海に流された幼な子は、あふるるばかりの恩寵に満ち給う主なるイエス (785–6) の保護の下に順風に乗って流れ去って、全ては穏やかに終わったかに見えるが、しかし老騎士の忠告を中心にした宮廷的動機は悪魔の奸計によって災いをもたらさずにはいない。赤子のその後については次章に譲るが、この国にとどまった母親には、三つの悲しみ (leide, 805)——兄と犯した罪 (810–2)、産褥後の衰弱 (813–4)、幼な子の行く末を思う胸の痛み (815–21)——に加えて、すぐさまこれまでをはるかに上回る恐ろしい苦しみ (der grœzist ungemach, 827) が加わる。兄の死の知らせが届く (825–30) のである。愛の絆 (der minne bant, 834) はあまりにも固く、妹に恋い焦がれる苦しみ (von senender nôt, 830; diu senende nôt, 851) のあまり兄は死を遂げたと言う。悪魔の奸計によって minne で罪を犯した兄は、世俗的 êre を護るという宮廷的動機に基づく聖地巡礼の旅の途上で、minne (848) のために死に襲われたのである。宮廷的動機はことごとく呪われていると言えよう。

この悪魔の辱しめ (des tiuvels spot, 886) によって神の恩寵 (hulde, 887) が奪われたそのことに大きな恐れを抱いた姫君は、兄を葬ったのち、キリストとの婚約を決意して、あらゆる求婚者をも退けつつ、神の恩寵 (hulde, 890) のために喜びと安楽 (vreude und gemach, 889) を避け、まことの悔い (diu wâre riuwe, 897) を示して罪から免れようとする。しかし、兄と犯した近親相姦の罪は重過ぎた。悪魔の企みはこれで終わりではなかったのである。のちにわが子と結婚することになったとき、詩人によって明らかにされているように、物語は悪魔の意志 (des tiuvels wille, 2246) によって二重の近親相姦へと突き進められるのである。この作品の根底には悪魔が潜んでおり、その作用は常に登場人物たちの宮廷的動機に乗じて働きかけるのであり、主人公たちが世俗的名声 (êre) のことを考えるや否や、またもや悪魔がその力を発揮することになるのである。

2. 僧院のグレゴーリウス——schande と ritterlîche gir——

さて、海に流された幼な子は、恵み深き主なる神 (929) に護られて、小舟で荒海を3日間さまよったのち、ある小島の海岸で二人の漁師に発見されることになる。ハルトマンは、神がこの子をここに送り給うた (942) と語っている通り、主人公の運命は最初は神に護られていると言えよう。二人の漁師は小箱を島へ持ち帰って、岸辺で待ち受けていた修道院長に対して最初は秘密にしようとするが、小箱の中から聞こえてきた赤子の泣き声によって僧院長の気づくところとなる。僧院長は小箱の中から出てきた象牙板によりその幼な子の事情を知るが、漁師たちにはそれを語らず (verswîgen, 1045)、この秘密を自分の胸の中にしまっておく。しかし、捨て子の事実はもはや隠しようがなく、このことを秘密にするよう二人の漁師に誓わせるが、このことは新たな作り事を必要とする。すなわち、この子供は二人の漁師のうち裕福な漁師の孫であることにし、もう一人の貧しい漁師の方にその世話が任せられることになるのである。裕福な漁夫は秘密を守る代価として金1マルクをもらい、貧しき漁夫はその子の養育費として金2マルクを受け取るが、この金2マルクの由来がのちに主人公の運命を変えてしまうことになるのである。

ともかくもその貧しい漁師は、僧院長の命じた通りを実行し、幼な子は僧院長自らの手で洗礼を施され、僧院長自らの名を取ってグレゴーリウス (1136) と名付けられる。6歳になると、グレゴーリウスは漁夫夫婦のもとから修道院に引き取られ、修道士の衣を身につけ、読み書きを習い始め、11歳のときにはラテン語、14歳のときには神学・法学を修め、さらにその上およそこの地上にあって美点と呼ばれるもののことごとくを身につける。グレゴーリウスは要するに詩人ハルトマンによってもろもろの美徳を兼ね備えた理想の子供として描かれている (1235–72) のである。

ところが、15歳になったある日のこと、グレゴーリウスが漁夫の実の子を痛い目に遭わせてしまったことから、この「理想」の姿が崩壊されてしまう。詩人ハルトマンによって最初にグレゴーリウスの理想的な姿が描写されたのも、結局はこの欠点をさらけ出すのが目的であったのか

も知れない。秘密のヴェールに包まれた表面的な理想がこうしてふとしたことから壊れてしまうことがここで表現されているとも言えるのである。ハルトマンはなるほどその子の意志ではなかった（1290）ことを語っているが、しかしこれは秘密のヴェールに包まれてまだ表面的な理想に過ぎない子供の落度である。母親に始まる秘密のモチーフの結果と考えてよいであろう。グレゴーリウスは、漁師の子に手を出してしまったあと、大いに胸を痛め、そのあとを追って家へ急いで帰るのであるが、そこで耳にしたのが養母の罵り——彼女は夫に金2マルクの由来を執拗に尋ね、秘密を知っていたのである——であり、グレゴーリウスは自分が捨て子（vuntkint, 1323; ellende, 1372）であることを知ってしまうのである。なるほどこのときはまだ両親の忌まわしい罪を知っているわけではなかったが、しかしまさに捨て子（vunden, 1411）というこの恥辱（unêre, 1413; schande, 1426）から彼はどこかへ逃れたいと考え始めて、僧院長に相談する。

僧院長はするとその恥辱と罵りの代わりに（vür laster und vür spot, 1453）徳と名望（tugent und êre, 1452）を得る道として修道院にとどまることを忠告し、さらに将来は後継者にしてやることをも約束する。これに対してグレゴーリウスは、この島から出るように自分を駆り立てて止まぬものとして、第一の理由である養母のもたらした恥辱（schande, 1490）のほかに、第二に自分が騎士の由緒ある家門の出であるかも知れぬということ、第三には騎士への憧れ（ze ritterschefte stât mîn wân, 1514）を挙げて、ここにグレゴーリウスと修道院長との論争は次第に激しくなってくるのである。

〉Sun, dîn rede enist niht guot:	「わが子よ、その考えはよろしくない。
durch got bekêre dînen muot.	神を思い、考えを変えるよう努めるがよい。
swer sich phaffen bilde	聖職者への道にありながら
gote machet wilde	神をうとんじ、
unde ritterschaft begât,	騎士の生活を送ろうなどとする者は、
der muoz mit maniger missetât	さまざまの過ちを犯し、
verwürken sêle unde lîp.	肉体も魂も滅ぼすことになるのだぞ。
swelh man oder wîp	男であれ女であれ、
sich von gote wendet,	神から身をそむける者は、
der wirt dâ von geschendet	恥辱に身を汚し、
und der helle verselt.	地獄に堕ちるがそのさだめ。
sun, ich hete dich erwelt	わが子よ、私はお前を
ze einem gotes kinde:	神の僕（しもべ）として選んだのだ。
ob ich ez an dir vinde,	お前が私の望みをかなえてくれるなら、
des wil ich iemer wesen vrô.〈	私はいつまでもそれを喜びとするだろう。」

(1515–29)

騎士への道を思いとどまり神の僕（しもべ）(gotes kint) として神に身を委ねよというこの修道院長の忠告に対して、グレゴーリウスは騎士として神に仕える (gotes ritter) ことを主張する。

〉ritterschaft daz ist ein leben,	「騎士の道を正しく行なう者以上に、
der im die mâze kan gegeben,	至福にいたり得る者はない
sô enmac nieman baz genesen.	と信じます。
er mac gotes ritter gerner wesen	いつわりの聖職者であるよりは、
danne ein betrogen klôsterman.〈	騎士として神に仕えるほうが勝るでしょう。」
(1531–5)	

修道院長は、しかし、グレゴーリウスが騎士の道においては何の経験もないことを取りあげて、肉体的に見ても騎士よりは僧に適していることを認めさせようとする[9]。

〉sun, mir saget vil maniges munt	「わが子よ、騎士の道に通じた多くの者から、
dem ze ritterschaft ist kunt:	私は聞いたことがある。
swer ze schuole belîbe	12の歳を迎えるまで、
unz er dâ vertrîbe	馬の稽古をしたこともなく、
ungeriten zwelf jâr,	学校にのみいた者は、
der müeze iemer vür wâr	生涯もう僧の生き方が
gebâren nâch den phaffen.	身についてしまうということだ。
dû bist vil wol geschaffen	お前はたしかに神の僕(しもべ)として、
ze einem gotes kinde	僧の合唱隊の隊員として、
und ze kôrgesinde:	ふさわしい素質の持ち主だ。
diu kutte gestuont nie manne baz.〈	お前ほど僧衣の似合う者はあるまい。」
(1547–57)	

グレゴーリウスは、この僧院長の言葉をあるところまでは認めるものの、しかし、自分は子供の頃から胸の中で騎士の道を学んでいることを口にして、騎士への憧れ (diu ritterlîche gir, 1622) を長々と語って聞かせる。

〉herre, iu ist vil wâr geseit:	「院長様、それはまことのことでございましょう。
ez bedarf vil wol gewonheit,	良き騎士とならんと欲するなら、
swer guot ritter wesen sol.	十分な修練が必要かと存じます。
ouch hân ich ez gelernet wol	だが、私は子供の時から、この胸の中で
von kinde in mînem muote hie:	もう騎士の道を十分学んでいるのでございます。
ez enkam ûz mînem sinne nie.	その夢が心を離れたことはついぞございません。
ich sage iu, sît der stunde	申し上げてよろしければ、
daz ich bedenken kunde	私が物事の是非善悪を
beidiu übel unde guot,	わきまえるようになって以来、
sô stuont ze ritterschaft mîn muot.	私の望みは騎士の道にあるのです。
… (1563–72)	…
herre, swaz ich der buoche kan,	院長様、私が学びました学問を、
dâ engerou mich nie niht an	私はいとうたことはございません。

9) Vgl. ebd., S. 19.

unde kunde ir gerne mêre:	できることならより一層多くを学びたくもございます。
iedoch sô man mich sêre	にもかかわらず、たとえ人がこれまでどんなに私を、
ie unz her ze den buochen twanc,	学びの道に励まそうとも、
sô turnierte mîn gedanc.	私の心は絶えず馬上試合にあったのです。
sô man mich buoche wente,	いかに学びの道になじもうと努めても、
wie sich mîn herze sente	私はどんなにか騎士にあこがれ、
und mîn gedanc spilte	心は楯を取って
gegen einem schilte!	戦うことを夢見てばかりいたのです。
ouch was mir ie vil ger	私の心は
vür den griffel zuo dem sper,	石筆を越えて槍に向かい、
vür die veder ze dem swerte:	ペンを越えて剣をあこがれつづけました。
daz ist des ich ie gerte. (1579–92)	これこそ私が望んだことであったのです。
…	…
nû helfet, lieber herre, mir	院長様、どうか私の騎士へのあこがれが、
daz diu ritterlîche gir	現実のものとなりますよう、
mit werken müeze volgân:	お力を貸して下さいませ。
sô habet ir wol ze mir getân.〈	そうしていただけたら、有難く存じます。」
(1621–4)	

こうして長々と語ったグレゴーリウスの騎士への憧れに驚いた僧院長は、ひとまず引き止めることを断念して、かつて小箱の中に添えられていた例の絹地で騎士の衣裳を作らせたが、例の象牙板と金貨のことは秘密のままにしておく。騎士とはなったものの財産がなければ、安楽な生活のため少なくともこの地にとどまるやも知れぬと思ったからである。僧院長はグレゴーリウスの財産なきことを挙げて再度この島にとどまるよう忠告するが、これに対してグレゴーリウスはこう答える。

Grêgôrius sprach: 〉herre,	グレゴーリウスは言った。「院長様、
versuochetz niht sô verre.	もうそれ以上はおっしゃいますな。
wolde ich gemach vür êre,	もし名望よりも安楽を私が望んでいるのでしたら、
sô volgete ich iuwer lêre	あなたのお諭しに従って、
und lieze nider mînen muot:	この胸の思いを鎮めることにも致しましょう。
wan mîn gemach wære hie guot.	ここにおれば、安らかなことはよくわかっています。
jâ tuot ez manigem schaden	しかし、財産を負い切れぬほど持った者が、
der der habe ist überladen:	そのために身に災いを招くのもよくあること。
der verlît sich durch gemach,	安逸をむさぼって、怠惰に流れるからです。
daz dem armen nie geschach	これに反し、貧しき者は、ただ心してさえいれば、
der dâ rehte ist gemuot:	そのような目には決して遭わぬもの。
wan der urbort umbe guot	なぜなら、財産を持たぬ者は、それを得ようと
den lîp manigen enden.	あらゆる手だてで身を粉にして働こうとするからです。
wie möhte erz baz gewenden?	そうするよりほか、何の方策がございましょう。

wan ob er sich gewirden kan,	もしそうした男が、世の名望を得ることが
er wirt vil lîhte ein sælic man	できたとすれば、彼は幸せな男となり、
unde über diu lant	身分高き人にもまして、
vür manigen herren erkant.〈	国中に名をとどろかすことになるのです。」
(1675-92)	

幸運 (sælde, 1706) は骨を折って (mit kumber, 1706) かちとるべきものである。私が誇り (êre, 1714) を失ったら、一体何になるだろう。然るべき労苦 (arbeit, 1715) を惜しまず、理性 (sinne, 1716) と男らしい勇気 (manheit, 1716) をもって、財産と名望 (guot und êre, 1717) をかちとることができれば、親から多くの財産を受け、しかもそれを蕩尽した人たちより、私はずっと多くの賞賛を受けることになるだろう。このように信じて疑わないグレゴーリウスが真剣であることを認めた修道院長は、ついに例の象牙板をグレゴーリウスに見せてしまう。それを読んだグレゴーリウスは、悲しみと喜びに満たされる (1747)。悲しみの原因は、自分が生まれ出ずるに至った罪 (sünde, 1750) のため、またこれとは相反して、喜びとなったのは、これまで知らずにいた高貴な生まれ (von hôher geburt, 1754) と豊かな財産 (von rîcher habe, 1754) のためである。財産は17マルクのもとでから今では150マルクにも増えていることを僧院長は付け加えて言う。両親の罪を知ったグレゴーリウスは激しく涙を流しながらまずはこう叫ぶ。

〉ouwê, lieber herre,	「院長様、何と悲しいことでしょう。
ich bin vervallen verre	私自身に罪はないとは言いながら、
âne alle mîne schulde.	私は大きな罪にまみれています。
wie sol ich gotes hulde	この象牙板に書かれたような、
gewinnen nâch der missetât	恐ろしい恥業の行なわれたあとで、
diu hie vor mir geschriben stât?〈	どうして私は神の恩寵を得られましょう。」
(1779-84)	

神の恩寵 (gotes hulde) を得る方策として僧院長はさらにもう一度この島にとどまることを勧める。

〉vil lieber sun, daz sage ich dir.	「愛するわが子よ。そのすべをお前に教えよう。
dêswâr, daz geloube mir,	まこと、私の言うことを心して聞き、信じて欲しい。
gestâstû bî der ritterschaft,	もしお前が騎士の道にとどまるなら、
sich, sô mêret sich diu kraft	お前の罪咎の重みは
dîner tägelîchen missetât	日々に増し、
und enwirt dîn niemer rât.	決して救いを見いだすことはないであろう。
dâ von sô lâ dîn irrikeit	その誤った道に進むことを
die dû an hâst geleit	やめるがよい。
unde diene gote hie.	ここにいて神に仕えることにするがよい。
ja enübersach er dienest nie.	神に仕える者を神はお見捨てにはならぬもの。

sun, nû stant im hie ze klage	神に対し、おのが罪の裁きをお願いし、
und verkoufe dîne kurze tage	この地上の短い命を、
umbe daz êwige leben.	永遠の生命をあがなうため捧げるがよい。
sun, den rât wil ich dir geben.〈	わが子よ、これが私の忠告なのだ。」
(1785–98)	

この修道院長の最後の忠告にもかかわらず、グレゴーリウスは自らの高貴な生まれと豊かな財産のために騎士社会への憧れをますます強めてしまう。

〉Ouwê, lieber herre,	「悲しいことではございますが、院長様、
jâ ist mîn gir noch merre	世に打って出ようというこの望みは、
zuo der verte dan ê.	一層強まってしまったのでございます。
ich engeruowe niemer mê	私はこの身がいずこの土地に生まれ、
und wil iemer varnde sîn,	だれの子であるのかを、
mir entuo noch gotes gnâde schîn	神の恩寵により知り得るまで、
von wanne ich sî oder wer.〈	憩うことなくさすらい探しつづけるつもりです。」
(1799–805)	

騎士の道への憧れそれ自体は決して罪あるものではない。もともと彼が騎士の子であることを考えれば、彼が騎士生活に憧憬を抱くのも当然のことと言ってもよいのかも知れない。しかし両親の忌まわしい罪を知ってしまった今、僧院長の再三再四にわたる諫止を少しも顧みることもせず、さらに自分の生まれの高貴なことを知り、しかも豊富な財産もできたことによって、ますます自らの世俗的名望 (êre) への意志を執拗に通したのであるから、グレゴーリウスの中に一つの罪が生まれたと言わなければならない。近親相姦から生まれ出た子供は、なるほど罪はない (vgl. 475–82) とはいうものの、何らかの義務が課せられているということもまた確かである。事実、小舟で海へ流されるとき、象牙板の中にはこれを拾った人に対してばかりではなくわが子に対しても母親のはっきりとした願いが書き込まれていたのである。

dannoch schreip si mê:	更につづけて母親はこう書き記した。
daz manz toufen solde	「この幼な子に何卒、洗礼のご配慮たまわりたく候。
und ziehen mit dem golde,	また養育はこの金子(きんす)もてお願い申し上げたく候。
und ob sîn vindære	この子を拾わるる方にして、
alsô kristen wære,	よきキリスト教徒たる場合には、
daz er im den schaz mêrte	何卒この子のためこの金子をば利殖致され、
und ez ouch diu buoch lêrte,	その利をもって、読み書きの教育をさずけ給うよう、
sîn tavel im behielte	また、この文(ふみ)は保存致されたく、
und im der schrift wielte,	いつの日か、この子の成長致し候とき、
würde ez iemer ze man,	自ら、わが事の次第を
daz er læse daran	知ることのできるよう、

alle dise geschiht,	お取り計らいいただきたく存じ候。
sô überhüebe er sich niht,	さすれば、この子、決して傲慢の心抱くまじ、
unde würde er alsô guot	と愚考致しおり候。この子に
daz er ze gote sînen muot	敬神の心、十分に
wenden begunde,	眼覚めし折には、
sô buozte er zaller stunde	一刻(ひととき)も忘れることなく、
durch sîner triuwen rât	子たる者の義務として、
sînes vater missetât,	父の罪を贖い、
und daz er ouch der gedæhte	また、この子を世に送りし母のことにも
diu in zer werlde bræhte:	思いを致すようあらまほしと存じおり候。
des wære in beiden nôt	そは、われら二人を、
vür den êwigen tôt. (740–62)	永劫の死より護らんがためにて候。」

彼の罪深い誕生の事実によってばかりではなく、母親の明確な依頼によってもグレゴーリウスは、彼の両親の罪を贖うようにとの課題を与えられていたのである[10]。彼の出生の不幸を彼が知ったら、彼は決して傲慢の心を抱くまい (sô überhüebe er sich niht, 752) というのが母の確信であった[11]。ところが、これを読んだグレゴーリウスは、修道院長が与えた宗教的な贖罪方法の助言を真剣に考えることもなく、騎士の道への憧れ (ritterlîche gir, 1622)、功名心 (cupiditas)、傲慢 (superbia) をますます強める[12]。なるほど母親は子供に騎士になってはならないなどとは決して言っていないが、しかし僧院長の宗教的な贖罪方法の忠告を無視し、騎士的名誉 (êre) への執着をますます強めたことによって、グレゴーリウスもまた悪魔の奸計に落とし入れられることになるのである。この作品の根底には――上でもすでに述べたように――悪魔が介在しており、登場人物たちの宮廷的動機に乗じてその悪魔の意志が働きかけ、それによって罪が積み重ねられてゆくのであり、そのため罪の決定的な契機を登場人物たちの行為の中に見い出すのはむづかしいことである。しかし少なくともここにおけるグレゴーリウスの決心は、修道院長が語った幸いに至る道 (genesen, 1448) かさもなくば破滅に至る道 (sterben, 1448) かという二つの道の岐路であったと言ってよいのではあるまいか。僧院長の宗教的な贖罪の戒めを無視して宮廷的世俗的名誉 (êre) を求めて騎士社会へ出かけてゆくというこの superbia (傲慢) の罪によって、グレゴーリウスは母と子の近親相姦というさらに恐ろしい罪を犯す運命に晒されたと言えるのである。

3. 母と子の近親相姦――êre と riuwe――

騎士グレゴーリウスはこうして冒険の旅へと出かける。彼は水夫(かこ)たちに、風の向かうそのままに船をまかせ、風の教える通り船を進め、決して逆らって舵を取ってはならぬ、と命じる (1831–

10) Peter WAPNEWSKI: a. a. O., S. 97.
11) Ebd. S. 97–98.
12) Vgl. ebd., S. 98.

6)。強い風と嵐に送られて漂着したのが母の国であったが、勿論グレゴーリウスはそれを知るよしもない。

到着した騎士グレゴーリウスはまたもや理想の騎士として描写されている。姿かたちも、また身につけた衣装、武具も、まこと非のうちどころなきものであり、また客人としての要求も決して法外に出ることはなく、まことに好まれる客人であったのである。そればかりかこの国の女王が強制的な求婚者のために包囲されて危機 (diu ungenâde, 1899) に瀕している事情を聞き知ると、騎士グレゴーリウスは理想の騎士らしく援助を申し出る。これはアルトゥース・ロマーンのあらすじの典型である。内膳頭に頼んで女王に出会うことになる場面も、アルトゥース・ロマーンにおけるミンネの要素を持っていると言えよう。ハルトマンはこう語っている。

nu behagete im diu vrouwe wol	女王はいたくグレゴーリウスの心をとらえた。
als einem manne ein wîp sol	が、それは、一点非の打ちどころなき素晴らしき女性が、
an der nihtes gebrast:	男の心をとらえたのだと言えるだろう。
ouch behagete ir der gast	この客人も、同様、女王の心をとらえていたのだ。
baz danne ie man getæte. (1955–9)	かつて男にこれほど心を奪われたことはないほどに。

グレゴーリウスは彼女に会ったこの時から、以前にも増して、その名を高め、名望を得んものと (ûf prîs und ûf êre, 1968)、一層努め励む。これはミンネを求めて励む騎士の典型的な姿である。騎士グレゴーリウスは日々怠らず、戦いに参加して、名を次第に高めてゆく。そしてひとかどの騎士となる。まこと彼には勇気と力と、それに騎士たるものの備うべきあらゆる技が備わったのである。常に名誉 (êre, 2051; 2061) を求めているグレゴーリウスは、そうしてついにこの国を荒らし女王を苦しめていたローマの大公とついに対決することとなり、激しい戦いの末、敵を打ち倒すことによって、今やグレゴーリウスは理想の騎士としてその名誉 (êre) は揺ぎないものとなる。さらにその女王の夫となり一国の主人(あるじ)となったということも、宮廷叙事詩さながらのあらすじなのである。

しかし、この「グレゴーリウス」におけるミンネ奉仕あるいは婦人奉仕は呪われているということを詩人はほのめかすことを忘れてはいなかった。この女王とグレゴーリウスが初めて対面した場面でそのあとにははっきりとすでにこう語られていたのである。

das macheten sîne ræte	これはまた、かつて昔イヴをして、
der ouch vroun Êven verriet,	神のおきてに背かしめた、
dô si von gotes gebote schiet.	かの悪魔めのたくらみにほかならぬものであった。
(1960–2)	

決闘に勝って女王を妻にかち得た今もまた、詩人は、ここに悪魔めの企ては再び満たされることとなった (2246) と語ったあと、こう続けている。

ez enwart nie wünne merre	女王と新しい主君とが、
dan diu vrouwe und der herre	互いに相手を見いだしたこの時ほど、
mit ein ander hâten,	大いなる喜びはなかったのだ。
wan si wâren berâten	なぜなら、二人は、互いに身を捧げて悔いぬ、
mit liebe in grôzen triuwen;	大きな愛の情熱に満ちていたのである。
seht, daz ergie mit *riuwen*. (2251–6)	だが、見よ、まもなくそれは**苦しみ**に終わる運命だった。

宮廷叙事詩に特有のミンネの喜びはここでは riuwe（悲しみ、後悔）に終わることを詩人は予示することを怠ってはいなかったのである。

その riuwe はまたもや秘密の行為から生まれる。グレゴーリウスは、自分の誕生の秘密は勿論のこと、修道院の島に滞在していたことさえ秘密にしており[13]、さらにこの母の国に来て毎日象牙板を読んで両親のための懺悔を行なっていることまでをもひた隠しにしているのである。それは真の贖罪行為と言えるだろうか。毎日象牙板を眺めることにより、母親の願いである贖罪を行なっているとはいえ、彼は騎士世界における栄誉 (êre) のみを追求していて、真の贖罪に身を捧げてはいないと言わなければならない。彼の懺悔は秘密のままにされているからである。秘密の行為はあばかれるのが常である。この世の人すべてから完全に隠されていると思い込んでいた彼の「秘密」(sîniu tougen, 2324) は、果たしてついに侍女に気づかれることとなるのである。侍女の告げ口で夫に何らかの秘密があることを知った妻も、その秘密を明らかにすることを恐れて、侍女の小賢しい知恵でこれまた秘密のうちに夫の部屋に入って、ついに例の象牙板を見い出してしまうのである。自らの書いた文を読み、狩りに出かけていた夫を呼び戻して確認するまでもなく、夫は彼女の子供であることを予感する。これも秘密の行為がもたらした結果であり、母から出発した秘密の鎖は、人から人へと巻きついて、今やまた母のもとに戻ってきたのである[14]。一体、彼女にはいかなる罪咎があって再度 (anderstunt, 2498) 恐ろしい罪を犯すことになったのであろうか。母がキリストとの婚約を破棄して世俗の騎士と結婚したことに罪があったのであろうか。

母の結婚する気になった次第をここで振り返ってみよう。結婚の発端は、国を護ること、詳しく言えば、再度敵に襲われることを気遣った家来たちが、国の安全のために国王を迎えることは神のみ心にもかなうことであると進言したことに始まる。彼女も、これぞ神のみ心にもかなうものと思いなして、グレゴーリウスを夫に迎える決意をするに至るのであるが、ここに少なくとも何らかの落度があったと言えるのではあるまいか。なるほど、神が彼女に送った (2241) その騎士は、ハンス・ザイクフリートが述べているように、彼女のかつての罪が赦されたというみしるし (wortzeichen) として見られうるし、また彼女自身もそう思っていたのであろう[15] が、しか

13) Vgl. K. Dieter Goebel: a. a. O., S. 29.
14) Ebd., S. 25.
15) Hans Seigfried: Der Schuldbegriff im *Gregorius* und im *Armen Heinrich* Hartmanns von Aue. Euphorion 65, 1971. S. 181.

しそれは彼女の早計な判断であった。彼女がこれまでかつての罪を償うべく、悲しみをもって行なってきた心からの贖罪は——彼女自身、二度目の大罪を悟るや否や、そう思った (2488–98) ように——まだ神に聴きとどけられはしなかったのである。心から贖罪を行なっているとはいえ、それがまだ不十分であったことは、「その生まれ、その容姿、その富といい若さといい、はたまたその美しさ、その誠、その育ちもまた心ばえも、とにかくその気高さのゆえ、彼女は高貴なる男の夫人としてまことにふさわしい女性のままだった」(864–70) ことからも明らかである[16]。さらにグレゴーリウスがこの国に到着したときにも、彼が身につけている絹の衣裳に思いあたることがあるにもかかわらずその由来を彼に尋ねなかったのも、彼女の贖罪が十分徹底していなかったことを証明するものと考えることもできよう。贖罪が不十分な上に、またもや国を護るという世俗的な名誉 (êre) のためにキリストとの婚約を解消して世俗の騎士と結婚したのであるから、彼女を罪の淵に落とすという悪魔の唆かしを神が黙って見過ごしたのも当然のことであったと考えても差し支えあるまい。この彼女の宮廷的動機に乗じて、またもや悪魔がその力を発揮したのである。全てはこうして悪魔によってこの母と子の結びつきへと運命づけられていたのであり、母はグレゴーリウスの前でこう嘆くのである。

〉sô hât uns des tiuvels rât	「私たちは身も心も、悪魔の計らいにより、
versenket sêle unde lîp:	滅ぼされているのです。
ich bin iuwer muoter und iuwer wîp.〈 (2602–4)	私はあなたの母であり、そして妻なのです。」

従って、母と子が陥った近親相姦の罪は、グレゴーリウス側にその原因を求めれば、世俗的名声 (êre) を求める騎士の傲慢 (superbia) の行為の必然的な結果であり、また母の側に求めるとするならば、世俗的名望 (êre) のためにキリストとの婚約を破棄したことに対するかつての罪の報いである。このグレゴーリウスの superbia の罪と母の以前の罪の報いが悪魔の力によって手と手を取り合い、ついには母と子の近親相姦という聞くも恐ろしい大罪をもたらす結果となったのである。母と子を取り巻く宮廷社会はことごとく悪魔によって呪われていると言えよう。「宮廷文化」の道徳的・教育的そして浄化的な力である minne は、ここでは二度にわたって悪魔の仕業であり[17]、宮廷的男性の本質を構成する騎士的徳目である êre は、これまた二度にわたって悪魔と罪の道具と化しているからである[18]。この作品においては宮廷的動機はことごとく悪魔の奸計に落ち、災いをもたらす結果となるのである。

しかし、宮廷社会における悪魔の作用を展開させるのが、ハルトマンの本来の意図ではない。なぜなら、二人が絶望の奈落の底に陥ってしまったあとで、詩人はグレゴーリウスに、すぐさま

16) 母と子の近親相姦後の懺悔贖罪と比較せよ。のちには肉体の力も美しさも失われる (3850–2) のに対して、ここではまだ美しい (1896–7) ままである。本稿註32) をも参照せよ。

17) Vgl. Peter Wapnewski: a. a. O., S. 98.

18) Vgl. ebd., S. 99.

母に向かって次のように忠告させているからである。

〉Muoter〈, sprach Grêgôrius,	「母上」、グレゴーリウスはこう言った。
〉gesprechet niemer mêre alsus:	「そのようなことは、もう、おおせられますな。
ez ist wider dem gebote.	それは神の掟に反すること。
niht verzwîvelt an gote:	**神の恩寵を疑ってはなりませぬ。**
ir sult vil harte wol genesen.	必ずや、あなたにも救いはあるのです。
jâ hân ich einen trôst gelesen	どんな罪咎を犯しても、まことそれを悔いるなら、
daz got die wâren riuwe hât	神はいつかはこれを贖罪と見なし給うとの、
ze buoze über alle missetât.	ありがたいお言葉を読んだことがあるのです。
iuwer sêle ist nie sô ungesunt,	もしあなたの両のまなこが、いつか心からの後悔に、
wirt iu daz ouge ze einer stunt	涙にぬれそぼる時があるのなら、
von herzelîcher riuwe naz,	あなたの魂はもはや救われ得ぬほどに
ir sît genesen, geloubet daz.	滅び去ってはいないのです。どうぞ信じて下さい。
belîbet bî iuwerm lande.	母上はどうかこの土地におとどまり下さい。
an spîse und an gewande	食べるものと着るものは、
sult ir dem lîbe entziehen,	できる限り粗末にし、
gemach und vreude vliehen.	安楽と喜びは避けるのです。
ir ensultz sô niht behalten	いかなる世俗の誉れをも
daz irs iht wellet walten	享受しては
durch dehein werltlich êre,	なりません。
niuwan daz ir deste mêre	あなたの財産を捧げ尽くし、
gote rihtet mit dem guote. (2695–715)	神に仕えるようになさるのです。
...	...
ir sît ein schuldic wîp:	あなたは重い罪を負った方。
des lât engelten den lîp	だからあなたのそのからだを
mit tägelîcher arbeit	日々苦しめることが贖罪なのです。
sô daz im sî widerseit	肉体が最も欲する安楽を
des er dâ aller meiste ger.	あなたの肉体から遠ざけて下さい。
sus habet in, unz er iu wer,	そしてその肉体を、命の終わるその日まで、
in der riuwen bande.	悔いの鎖でつなぐのです。
den gelt von iuwerm lande	あなたの国の収入を
den teilet mit den armen:	貧しき者と分かつのです。さすれば、
sô müezet ir gote erbarmen.〈	神のお許しがあなたに与えられることでしょう。」
(2721–30)	

グレゴーリウスが母に与えたこの忠告は、——K. D. ゲーベルが指摘しているように——かつて兄妹の近親相姦の際に老騎士が母に与えていた忠告と正確な対応関係にあり[19]、個々の点においては双方はほぼ同じ内容の指示である[20]と言えるが、しかしグレゴーリウスの忠告においては

19) K. Dieter Goebel: a. a. O., S. 15.

20) Ebd.

なおいっそう大きな懺悔の厳格さが語られている[21]。母はこの国にとどまるがよい（603; 2707）という同じ内容の指示にしても、老騎士の忠告の場合は――なるほどおのが身と財貨を捧げ尽くして裁きを神に委ねよ（621-2）という言葉が聞かれはするものの――国の存続という政治的な色調が強い[22]のに対して、グレゴーリウスの忠告の場合には徹底的な懺悔贖罪の色合いが強い。このことは、グレゴーリウスの忠告の最後の方で、国のどこかに立派な僧院を建てて、それによって神の怒りを鎮めるがよい（2731-5）と語っていることからも頷けることである。国の存続を望む老騎士の忠告が宮廷的動機に基づくものであるとすれば、国も財産もこの世への執着も断ち切った（2745-7）このグレゴーリウスの忠告は宗教的動機に基づくものであり、この点で両者はコントラストを成すものであるとも言えよう。さらに上で引用したグレゴーリウスの忠告の4行目（イタリック体・太字体）にあたる「神の恩寵を疑ってはならない」(2724) という教示は、老騎士の忠告には語られていないものであり、このことは特に注目すべき事柄である。経験豊かな老騎士によっても口にされていないこの重要な忠告を、今やグレゴーリウス自身が与えるのであるから、グレゴーリウスは内面的にも浄化の兆しが見えてきたと理解してもよかろう。ここでグレゴーリウスには神を敬う心が生まれてきたのであり、神の恩寵を疑ってはならぬという認識に到達したグレゴーリウスには、今や真の贖罪の道が開けたのである。今までの騎士的な方法、すなわち、騎士として困窮している国と人々を救い出し勲功を立てることによって両親の忌まわしい罪を贖おうとする方法は、罪を背負って騎士社会に生まれてきたグレゴーリウスにとっては真の贖罪ではなかった。否、それどころかそれはかえって悪魔の罠に落ち、大罪を犯す結果とさえなった。また母側にしても、すでに述べたように、身体は依然として美しいままであり、真の贖罪に徹しているとは言えなかった。安楽も喜びも避け（2710）、いかなる世俗的な êre（誉れ）をも享受することなく（2711-13）、財産を捧げ尽くして神に仕える（2714-5）という宗教的な真の贖罪が必要であることを今やグレゴーリウスは悟り、母はグレゴーリウスの教示に従い国内で、またグレゴーリウスは国外に出て、それを実行に移し始めるのである。

4. 岩の上のグレゴーリウス――nôt と buoze――

グレゴーリウスはこうして苦難（dies nôt, 2760）に耐えることを喜びとして再度自分の生まれた国を出発することになる。この第二の出発は、捨て子として海に委ねられた第一の出発と著しいコントラストを成していると言えよう。第一の出発の際の宮廷的な秘密のモチーフはここでは宗教的な告白のモチーフに取り替えられているのである。両者を比較しながら述べてみよう。

第一の出発の際には海の波によって3日3晩ののちある小島の海岸にまで運ばれてきたのに対して、この第二の出発の場合は自らの足で茨の道を進んで、3日目の日に漁師の小屋に辿り着く。両者の場合に役割を演じているのが漁師である[23]。前者の場合には二人の漁師によって小島まで

21) Ebd., S. 39.
22) Ebd.
23) Vgl. ebd., S. 17.

運ばれたと同じように、後者の場合にも漁師によって岩に連れられてゆくからである。小島と岩は対応関係にある[24] と言えよう。自らの国を出てこうして一つの島あるいは岩がグレゴーリウスの滞在場所となるからである。さらに両者の場合において罵りを受けることになる[25] のだが、前者の場合は漁師の妻の罵りにはグレゴーリウスは耐えられないほど恥辱 (schande) を感じ、それがその島を出てゆく大きなきっかけとなったのに対して、後者の場合は漁師の小屋に辿り着いた世捨人グレゴーリウスは今や真の「贖罪者」(der riuwesære, 2780) なのであり、そこの漁師から罵られて (spot, 2782) も、この悪罵を悲しみもせず、むしろ心軽やかに聞く (2812–5)。漁師の嘲りを喜んで聞くのである。それどころかこの手ひどい辱しめを神に感謝さえする (2822–5)。両者は著しく対照的であることが明白である。漁師の妻のあわれみで出された食事も、彼は燕麦パンの皮のところとただ一杯の井戸水だけを所望して、「私の罪ある身には、このような食事さえ、ありがたすぎるほどなのです」(2896–7) と言って感謝する。この言葉に対して漁師の罵りはさらに激しくなるのであるが、心正しい男グレゴーリウスは、心も軽くこの再度の罵り (2901–44) を聞き、反対に罪を贖うのに恰好の恐ろしい場所を尋ねる。

er sprach: 〉herre, ich bin ein man	彼は言った。「ご主人。私は、
daz ich niht ahte wizzen kan	計ることもできぬ
mîner süntlîchen schulde	大きな罪を負った男。
und suoche umb gotes hulde	神の許しを得られるよう、
ein stat in dirre wüeste,	この荒野で一つの場所を捜しています。
ûf der ich iemer müeste	私に死の日の至るまで、
büezen unz an mînen tôt	この身になべての苦しみを負わせ、
vaste mit des lîbes *nôt*.	罪のあがないに徹する場所を。
ez ist hiute der dritte tac	世を捨て、
daz ich der werlde verphlac	人里離れた野をさまよいつづけて、
und allez nâch der wilde gie.	今日で3日目です。
ich enversach mich niht hie	ここで人様の住む家を見ようとは、
gebiuwes noch liute.	思いもかけぬことでした。
sît daz mich hiute	折角こうして、
mîn wec zuo iu getragen hât,	あなたがたのところへ導かれて参ったのです。
sô suoche ich gnâde unde rât.	どうかお力をお貸し下さい。
wizzet ir iender hie bî	もしどこか、このあたりに、
ein stat diu mir gevellic sî,	私の身にふさわしい、
einen wilden stein oder ein hol,	恐ろしい岩山か、ほら穴でもご存じなら、
des bewîset mich: sô tuot ir wol.〈	どうぞその場所をお教え下さい。」

(2955–74)

自らの罪を告白し、苦しみ (nôt) でもってその罪を贖う意志のあることを示したこのグレゴーリ

24) Vgl. ebd., S. 16.
25) Vgl. ebd., S. 17.

ウスの言葉に対して、漁師はあざけって (mit hônschaft, 3015)、ゆっくり痛い目に遭いながら罪の償いができる (2983–4) 場所として、沖に荒涼たる岩のあることを教える。さらに鉄の足枷で足をとめておけばよいことを教えると、グレゴーリウスはその提案を、真剣に、とてもこれ以上は望めぬほどの願ってもないものである (3016) と思い、翌朝さっそくそこへ連れて行ってもらう。荒れ果てた岩の上で足枷がとめられると、その鍵は海へ投げ捨てられる。漁師は「その鍵が見つかることにでもなれば、お前さんは罪人どころか聖者さまだ」(3095–9) とののしりわめいて、そこをこぎ去ってゆく。こうして哀れな (der arme, 3101) グレゴーリウスの岩の上での懺悔贖罪の日々が続くのである。第一の小島では漁師の妻の罵りで小島を去ることになったのに対して、この場合には反対に漁師の罵りまじりの提案がきっかけで孤岩にとどまることになったのである。この著しいコントラストから言えるのは、傲慢 (superbia) の心は消え去って、今や彼は心から神に帰依し、真の懺悔と贖罪の意志があるということである。そして彼の真の懺悔と贖罪の証しは17年間の孤岩での苦行という形で実現されるのである。こうして孤岩でわずかな水で露命をつなぎながら17年間も苦行に身を捧げたのも、両親の犯した近親相姦の罪を償い、また自らが知らずに母と犯した近親相姦の罪を贖うためである。両親の罪は子供には及ばぬもの (475–7) と言いながら、また知らずに犯した罪は教会の掟においてもその責任を問わないことになっていた[26] とはいうものの、それらを謙虚に受けとめて懺悔し贖罪することによって、生まれた瞬間からおよそ17年間[27] 背負い続けてきたもろもろの罪が赦されることになるのである。グレゴーリウスの贖罪生活が17年間であったのも、グレゴーリウスが生まれたと同時に身に背負ってしまった17年間の罪を償うためには、それと同じ歳月を必要としたからであると考えてよいであろう。17年間も喜びも安楽も避けて、荒れ果てた孤岩でわずかばかりの水で生き延びながら、苦悩 (nôt) に満ちた真の贖罪 (buoze) に身を捧げることによって、やがてその償いは見事に神によって認められることになるのである。

5. 教皇グレゴーリウス——buoze と gnâde——

その神の恵み (gnâde, 3158) は、まず、ローマの教皇が亡くなったあと、二人の経験豊かなローマ人の枕辺に現われる。すなわち、その二人に「人里離れた岩の上に17年間の歳月をすわり暮らしている者を教皇にせよ」(3179–86) という同じ神の声が聞こえるという奇跡が起こったのである。二人がこれを異口同音に繰り返すと、これを聞いたローマの人々は喜んでこれを信じ、神を称えたのである。そこでその二人はあてもなく捜しに出かけたが、神の導きによって、17年前グレゴーリウスが立ち寄ったあの漁師の小屋へと辿り着いたのである。

そして二度目の神の恵みは、その日漁師がとってきた一匹の魚に現われる。すなわち、漁師が

26) 相良守峯：前掲書371頁参照。

27) 母と子の近親相姦を犯したとき、グレゴーリウスが何歳であったかはテクストから読み取ることはできないが、しかし修道院の島を去ったとき15歳であったことは明らかであり (1234)、母との結婚はそれからおよそ２年後と考えてもよいであろう。

二人のローマ人のためにその魚を料理しているとその腹の中から、かつて海の中へ投げ捨てられていたあの足枷の鍵が出てきたのである。奇跡というほかはない。鍵を見つけた漁師は、直ちにあの時のおのが仕業が、いかに愚かであったかを悟り、悔いを示して、ローマの使者二人に、グレゴーリウスにまつわる一切の経緯を物語るのである。

この話を聞いて喜んだ使者たちは、翌日漁師にその岩へ連れて行ってもらい、まことの殉教者グレゴーリウス (der lebende marterære, 3378) を探したところ、見い出したのは痩せ衰えて見るも哀れな姿のグレゴーリウスであった。彼らははなはだしくあわれみの情をもよおして、涙の雨が彼らの衣服を、しとどにぬらすほどであった。彼らは事の次第をグレゴーリウスに告げると、この男は頭(こうべ)を低く地にたれて罪を告白して次のように言う。

〉sît ir kristen liute,	「あなた方がよきキリスト教徒であるならば、
sô êret got hiute	神の徳をお称えあれ。
und gât vil drâte von mir,	そして即刻この場をお去り下さい。
wande ich der êren wol enbir	なぜなら、私はなべての誉れを失った身、
daz mir diu gnâde iht geschehe	この身に神の恩寵は、決して与えられることはなく、
daz ich iemen guoter ane sehe	罪に汚れたこの眼(まなこ)は、誉れ高き人びとを、
mit so süntlîchen ougen.	決して仰ぎ見てはならぬのです。
gote enist daz niht tougen:	神もみそなわすその通り、
mîn vleisch ist sô unreine	私のこの肉体は、あまりにも汚れに満ち、
daz ich billich eine	死に至るまでただひとり、
belîbe unz an mînen tôt.	ここにとどまるがよろしいのです。
daz mir der êwigen nôt	私の魂が、この永劫の罪咎を
diu sêle über werde,	いつか克服できるよう、この地上にあって
daz koufe ich ûf der erde. (3505–18)	償いの日をこうして重ねているのでございます。
…	…
ich hân umbe unsern herren got	あなた方がこの私を、
verdienet leider verre baz	すべてを統(す)べる最高の位にとお望みとは、
sînen zornlîchen haz	私をあざけるためとしか思えません。
dan daz er an mich kêre	教皇が受けるべき、恩寵や誉れよりも、
die gnâde und die êre	私は主なる神によって、怒りと憎しみを
die ein bâbest haben sol.	受けるのに、ずっとふさわしい男なのです。
man enbirt mîn ze Rôme wol:	私がローマにいなくても、何の妨げもありますまい。
iu wære ze mir niht wol geschehen.	私がローマにいたからとて、皆さまは何の幸せが
muget ir doch mînen lîp sehen?	得られましょう。どうぞ私のこのからだをご覧下さい。
der ist sô ungenæme,	このからだは、あまりにも厭わしく、
den êren widerzæme.	高い誉れにふさわしいものではございません。
wart mir ie herren vuore kunt,	高い身分の殿方の生きざまも、かつては心得て
der ist vergezzen ze dirre stunt.	いましたが、今ではすっかり忘れてしまった私です。
ich bin der liute ungewon,	人びとと共に生きるすべも忘れたこの私は、

den bin ich billichen von.	むしろ人を避けて暮らしましょう。
ir herren, nemet selbe war,	皆さま、どうぞしかとご覧下さい。
mir sint verwandelt vil gar	大きな権力を持つ
der sin, der lîp und die site	人間にふさわしい、
die dem von rehte wonent mite	精神も肉体も生き方も、
der grôzes gewaltes phlegen sol:	すべて私は失ってしまったのでございます。
ich enzime ze bâbest niht wol.〈	私には教皇の資格はございません。」

(3542–62)

真の贖罪に身を捧げているグレゴーリウスは、こうしてローマの使者たちと言葉を交わしたうれしさ楽しさをも、神の前に、重ねて贖罪せねばならぬかと、恐れているくらい (3580–4) なのである。このグレゴーリウスとローマ人たちの対話は、かつてのグレゴーリウスと修道院長との対話と著しいコントラストを成していることがここで明らかである。僧院長との対話においては、肉体的にも自分は騎士にむいていることをしきりに主張した[28] のに対して、ここでは反対に肉体的にも教皇に適していないことを主張している[29] からである。言い換えれば、前者の場合にはグレゴーリウスは宮廷的名誉 (êre) を求めてしきりにその島を去ることを主張したのに、後者の場合には神の栄誉のためにこの岩にとどまることを主張しているからである。このコントラストから言えることはもうすでに明白である。今やグレゴーリウスにとって問題なのは世俗的名誉 (êre) ではなく、神の栄誉 (êre) である。神の栄誉のためにこの岩の上で贖罪 (buoze) に努めることが今の彼の責務だと認識しているのである。だからもし、この岩を去るとすれば、神のみしるしがなければならないのである。彼はこう言う。

〉nu ist niemens sünde alsô grôz,	「さて、いかなる罪と言えど、
des gewalt die helle entslôz,	そのお力をもって地獄の戸も開き給うお方さまの、
des gnâde ensî noch merre.	厚い恩寵の及ばぬものはなしと申します。
ob got unser herre	もしわれらの主なる神が、
mîner manigen missetât	その暖かきみ心もて、
durch sînen trôst vergezzen hât	わがかずかずの罪を許し給い、
und ob ich reine worden bin,	わが身が清らかになったというのであれば、
des muoz er uns drin	神は、まことのみしるしを、
ein rehtez wortzeichen geben	お示し下さるにちがいございません。
oder sich muoz mîn leben	さもなくば、私はわが生涯を、
ûf disem steine enden.	この岩の上で終えるほかはないのです。
er muoz mir wider senden	すなわち、神が今一度、
den slüzzel dâ mit ich dâ bin	この身をいましめている鎖の鍵を、
sus vaste beslozzen in	お返し下さることのほか、
oder ich gerûmez niemer hie.〈	私がこの地を去るすべはないのでございます。」

(3609–23)

28) Vgl. K. Dieter Goebel: a. a. O., S. 19–20. 本稿註9) をも参照のこと。
29) Vgl. ebd., S. 20.

こうして鎖の鍵のことを持ち出して、グレゴーリウスはこの岩を去るわけにはゆかないことを口にするのであるが、これを聞いていた漁師が彼の前にひざまずいて激しい涙とともに懺悔をしながらその鍵を差し出すに及んでは、グレゴーリウスもこの岩を去ることを承諾する。それによって同時に真の悔悟を示した漁師も救われることとなるのであるが、漁師の罪が贖われたというところにもハルトマンの理想主義が窺えよう。

ところが、漁師の小屋に戻ったグレゴーリウスは、神のみしるしによって鎖をはずされはしたものの、例の象牙板が見つからぬうちはまだローマへ出かけるわけにはゆかない。17年前岩へ出かける際急いでいたため置き忘れていた象牙板が17年間彼の心を痛め続けた（3684-6）のである。彼が象牙板を置き忘れてきた粗末な小屋は、その後すぐ崩れ落ち、屋根も壁も、みな焚き物にされてはいたが、しかし、三度目の神の恵みとして、その象牙板は生い茂る雑草の中から再びグレゴーリウスの手に戻ることになったのである。この大いなる奇跡（ein vil grôzez zeichen, 3732）によって、グレゴーリウスはローマの使者たちの願いを完全に承諾すると同時に真の聖者（ein sælic man, 3739）となったと言えるのである。修道院の島を去るときはその象牙板を読んで出発が決定的となったように、この場合も象牙板が出発を決定的なものにしている。しかし、前者の場合はグレゴーリウスの高慢（superbia）な意志であったのに対して、後者の場合は神の意志によるものであり、この点に大きな違いがあると言えよう。

ローマへの旅はこうして神の意志によるものであり、神の示す奇跡的な保護（gnâde, 3753）の下にあると言える。旅路の途中、ただの一度も、彼らは危難に遭うこともなく、糧食はまた、おのずとわき出で、彼らが如何ほど食べかつ飲もうと、ついにローマに至るまで、少しも減ることはなかった（3747-52）からである。さらに神の奇跡はローマに入る前にも起こる。一行が到着する前、ローマの町では、だれも撞いたものはいなかったのに、ひとりでに鐘が響き渡り、彼らの新たなる教皇が、間もなく到着することを告げた(3756-60)のである。このことにより男も女も、来たるべき新たな教皇がまことの聖者であることを、だれしも認めることとなった（3761-2）のである。

教皇の座についてからも、グレゴーリウスは、聖霊により教えられていた正しい節度（diu mâze, 3794）をもって熱心に努める。彼の熱心な導きにより、ローマの民の神への愛はますます高まるばかりである。アキテーヌの地に暮らしていたグレゴーリウスの母も、この新しい教皇の噂を聞いて、かつての罪を贖うためローマを訪れて、おのが罪を告白する。ここで以前の秘密のモチーフが告白のモチーフに取り替えられていることは明白である[30]。以前母と子を取り巻いていた秘密のモチーフは災い多き再会に通じ、それは直ちに離別の結果をもたらしたのに対して、この告白のモチーフは幸せな永続的な再会に通じている[31]と言えよう。婦人の懺悔を聞いたとき、教皇は直ちに彼女が自分の母であることを認めたのである。そして敬虔な心正しき教皇グレゴーリウスは、彼がかつて命じた通りを、母が完全に行なっていた――彼女はおのが肉体と財産

30) Ebd., S. 23.
31) Vgl. ebd., S. 24.

とまた強固な意志により、何一ついとうことなく完うしていた（3942–8）のである[32]——ことを神に感謝し（3862–5）、自らが彼女の息子であることを明かして、最後にこう言うのである。

〉swie grôz und swie swære	「この私の罪咎が、
mîner sünden last wære,	如何に大きく、如何に重くあったにもせよ、
des hât nû got vergezzen	神は私を許し給い、
und hân alsus besezzen	かくのごとく、神の命により、
disen gewalt von gote.	この位についたのです。
ez kam von sînem gebote	ここに召命を受けたのは、
daz ich her wart erwelt:	神のご選択に他なりません。
alsus hân ich im geselt	そして今や私は、
beidiu sêle unde lîp.〈 (3927–35)	この肉体も魂も、神に捧げた身なのです。」

以前自らの意志を押し通して一国の主人（あるじ）となったのに対して、この「教皇」の座は自らの意志ではなく、神の意志によるものであることが、このグレゴーリウス自身の言葉からも明らかである。以前の国王としての地位はその国の秩序を乱し、母との離別をもたらしたが、今の教皇の地位はローマの民の神への愛をますます高めるとともに母との幸せな再会にも通じている。彼の身をとりまく木も草も、またおよそ緑なすものはみな全て、彼の汚れた声を聞き、彼の裸足に踏まれれば、そのみにくさに、枯れてしまう（3523–8）ほどであった国王グレゴーリウスは、過酷な贖罪行為を経て今や神の恵みによって、彼の前に立つ者は、だれであろうと、彼のやさしい祈りにより、その祝福の言葉により、あるいは手、あるいは衣に触れるだけで、直ちに苦悩から救われる（3779–84）という理想の教皇へと昇華されたのである。神の恩寵の偉大さを物語るものである。グレゴーリウスが騎士的行為で罪を犯したのち過酷な懺悔贖罪の苦行に身を捧げてついに神の恩寵によって到達したこの「教皇」こそまさに、かつて争った彼の騎士への憧れ（gotes ritter）と修道院長の忠告（gotes kint）との調和的結合であり、罪にまみれて騎士社会に生まれたグレゴーリウスが到達すべき理想の調和的世界であったと言えよう。この理想の世界に到達するためには、傲慢（superbia）の心を捨て、神へ帰依する心を持ち、神の恩寵を疑わないことが必要だったのである。まさにこの神の恩寵を疑わないことこそこの作品の意図するところであり、詩人ハルトマンはエピローグでこう語っている。

dâ sol der sündige man	むしろすでに罪ある者は、この物語から、
ein sælic bilde nemen an,	たとえ犯した罪は重くとも、
swie vil er gesündet hât,	悔悟し、
daz sîn doch wirt guot rât,	まことの贖罪にその身を捧げるなら、
ob er die riuwe begât	やがてその身も救われようとの、
und rehte buoze bestât. (3983–8)	善きたとえを引き出してもらいたい。

32) 兄と妹の近親相姦後の懺悔贖罪と比較せよ。母は真の懺悔贖罪に身を捧げてきたため、肉体の力もまた美しさも失なわれ、グレゴーリウスの側からも最初は誰であるのか、わからなかったくらい（3846–55）なのである。本稿註16）をも参照せよ。

このことはまたプロローグにおいてもすでに明らかにされていたのである。

des ist ze hœrenne nôt	山の如き重き罪に
und ze merkenne in allen	打ちひしがれている人びとは、
die dâ sint vervallen	この物語に耳を傾け、
under bercswæren schulden,	次のような良きたとえを汲み取っていただきたい。
ob er ze gotes hulden	すなわち、如何なる罪であろうとも、
dannoch wider gâhet,	神の愛にすがらんと急ぎおのが道を変える者を、
daz in got gerne emphâhet.	神は暖かく迎え給うとの善きたとえを。
wan sîner gnâden ist sô vil	なぜなら、神の恩寵は、いとも豊かであるがゆえに、
daz er des niene wil	罪ある者が誤って、もはや救いなきものと絶望し、
und ez gar verboten hât	希望を捨てるそのことを、
daz man durch deheine missetât	神は決して望み給わず、
an im iht zwîvelhaft bestê.	それどころか固く禁じ給うているのである。
ez enist dehein sünde mê,	悔悟して解かれぬ罪はただ一つ、
man enwerde ir mit der riuwe	それは、神のみ心を疑う罪であり、
ledic unde niuwe,	この罪のほかはいかなる罪も、心からなる悔悟により
schœne und reine,	解かれ許されて、その身は再びよみがえり、
niuwan der zwîvel eine:	美しく清らかな姿とはなるのである。
der ist ein mortgalle	神のみ心への疑いこそ、
ze dem êwigen valle	永劫の死に至る苦き毒であり、
den nieman mac gesüezen	だれひとりその毒を解くことはなく、
noch wider got gebüezen. (150–70)	神に悔悟するすべもないのである。

当時最も重い罪であったと考えられる近親相姦の罪の問題を真正面から取り扱いながらも、こうして神の恩寵が授けられることを信じて疑わないというところにハルトマンの理想主義が窺えよう。山の如き重い罪でも、心から懺悔贖罪に身を捧げるならば、必ずや神に赦されることになるのであり、悔悟して解かれぬ罪はただ神のみ心を疑う罪だけ (Vgl. auch 65ff.) である。ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」は人間にとって最も大切な神への献身を語った物語であると言えよう。

結　　び

以上見てきたように、アルトゥース・ロマーンで重要な役割を演じている宮廷文化の二大支柱であるミンネ (minne) と名誉 (êre) は、この「グレゴーリウス」においては二度にわたって呪われたものとして把握されている。兄と妹の近親相姦においても、また母と子の近親相姦においても、minne は悪魔の仕業であり[33]、êre は悪魔と罪の道具と化しているからである[34]。特に世俗

33) Vgl. Peter WAPNEWSKI: a. a. O., S. 98.
34) Vgl. ebd., S. 99.

的名誉 (êre) を護るために秘密を作ってゆくという主人公たちの宮廷的動機に乗じて、悪魔がその力を発揮し、それによって罪が重ねられてゆくのである。従って、この作品の要である母と子の近親相姦の罪の決定的な契機を二人の行為のうちに求めるならば、その罪はグレゴーリウスの世俗的な名誉 (êre) を求める傲慢 (surperbia) な騎士的行為の必然的な結果であり、また国を護るという世俗的名誉 (êre) のために決意するに至った母のキリストとの婚約破棄に対するかつての罪の報いであるということになろう。この彼の superbia の罪と母の以前の罪の報いが、悪魔の力によって手と手を取り合い、母と子の近親相姦という聞くも恐ろしい大罪をもたらす結果となったのである。母と子を取り巻く宮廷社会はことごとく悪魔によって呪われていると言えよう。

しかし、宮廷世界における悪魔の作用を展開させるのが、詩人ハルトマンの本来の意図ではない。この物語の主人公は、なるほど大罪にまみれはするが、しかし「善き罪人」(der *guote* sündære, 176) であることがプロローグですでにほのめかされているからである。主人公グレゴーリウスはかつての superbia の行為を顧みて、のちには真の宗教的な懺悔贖罪に身を捧げるのである。以前の宮廷的な秘密のモチーフはここでは宗教的な告白のモチーフによって取り替えられ[35]、今やグレゴーリウスが心から神に帰依していることは、上で指摘してきたさまざまなコントラストから明白である。騎士として困窮している国や人々を救い出し勲功を立てることによって罪を贖おうとする方法ではなく、――それはむしろさらに大きな罪の契機となったのであり――そうではなく、安楽も喜びも避けて、いかなる世俗的な名誉 (êre) をも享受することなく、財産を捧げ尽くして神に仕えるという宗教的な真の贖罪によって、初めて罪人グレゴーリウスには神の赦しが得られ、聖者と称えられるばかりか、教皇にまで高められるのである。グレゴーリウスがこうして騎士的行為で罪を犯したのち過酷な懺悔贖罪に身を捧げて最後に神の恵みによって到達した「教皇」は、かつて争った彼の騎士への憧れ (gotes ritter) と修道院長の忠告 (gotes kint) との調和的結合であり、罪にまみれて騎士社会に生まれたグレゴーリウスが到達すべき理想の調和的世界だったのである。「教皇」は理想の調和的世界の象徴であり、この理想の世界に到達するためには、superbia の心を捨て、神に帰依する心を持ち、神の恩寵を疑わないことが必要だったのである。まさにこの「神の恩寵を疑わず、罪の裁きを神に委ねよ」ということこそがこの作品の意図するところであり、このテーマは詩人自らによってプロローグ (150–70) とエピローグ (3983–8) において明言されているだけではなく、実は物語の冒頭にある父王の教え (57–8) に始まり、老騎士 (621–2)、僧院長 (1795) そしてグレゴーリウス自身 (2698–702) によっても語り継がれているのである。父王、老騎士そして僧院長というふうに語り継がれてきたこのテーマをグレゴーリウスは、しかし、彼らが意味しているよりも一層厳格で禁欲主義的な方法で実行することによって、罪から一転して最高の位へと高められたのである。このようにこの世で最も重い罪の問題を正真面から取り扱いながらも、神の最高の恩寵が授けられるというところにこの作品の本質があり、このことを信じて疑わないところにハルトマンの理想主義が窺え

35) K. Dieter Goebel: a. a. O., S. 23.

るのである。ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴーリウス」は人間にとって最も大切な神への献身と神の恩寵の偉大さを謳った物語であると言えよう。そしてこの神への帰依と神の偉大さは次の作品「哀れなハインリヒ」においてさらに内面的に観察されることになるのである。

(1984・9・7)

※テクストは »Hermann PAUL (Hrsg.): Gregorius von Hartmann von Aue. 13., neue bearbeitete Auflage besorgt von Burghart WACHINGER. (Altdeutsche Textbibliothek Nr. 2) Max Niemeyer Verlag Tübingen 1984.« を使用し、テクストから邦語で引用・説明している部分については、中島悠爾氏の訳（郁文堂刊「ハルトマン作品集」）を引用し活用させて頂きましたが、字数等の都合で表現をところどころ変えさせて頂いたところもあることを最後に付記しておきます。